

漢法苞徳塾資料	No. 109
区分	治療論・配穴(内経学会発表会)
タイトル	七十四難に関連して
著者	八木素萌
作成日	1990.01.11

1. 序論

◎配穴取穴をどのように決定するのが良いか、これは鍼灸臨床にとって重要な問題であるが、『難経』の記述は多くの示唆をもたらしてくれる。『経絡治療』と呼ばれる取穴方式にも、具体的に見れば種々の配穴があるが、「本治法」と言う部分では六十九難の原理を主なものとして、手足の五行穴を配分している。七十五難も加えられているのは衆知のことである。

『経絡治療』創草期の中心的指導者である柳谷素霊による「臟腑虚実補瀉表」の配穴を見ると、「補」すときには「自経の母穴と母経の自穴を補し、自経の剋穴と剋経の自穴とを瀉し」ている、「瀉」の場合には「自経の剋穴と剋経の自穴を補し自経の子穴と子経の自穴を瀉し」ている。これは六十九難と七十五難の配穴法を組み合わせたものである。故に『難経』に基づいていると主張する理由であるが、『難経』の取穴法は、六十九難と七十五難のみでは無く他にも極めて重要な配穴原理が記述されている。

2. 五俞穴の性質の問題

◎六十八難の五俞穴の主治症「井は心下満」「滎は身熱」「兪は体重節痛」「経は喘咳寒熱」「合は逆気而泄」を主ると言うのを、単に記述されている病候を主治すると解釈するのは正しくない。これは次の様な諸難の記述から明らかになる。

六十四難に兪穴の五行配当は、

- a) 陰経では・井=木・滎=火・兪=土・経=金・合=水となり、
- b) 陽経では・井=金・滎=水・兪=木・経=火・合=土となる事が記述されている。

六十三難には「井は東方春なり」とあり、六十五難にも「井は東方春なり」「合は北方冬なり」と述べる。四十九難では「心病」を例に挙げて「何ぞ以て中風に之れを得たることを知るや～肝・心の邪と為る～其の病・身熱し脇下満痛し・其の脈は浮大にして弦」「何ぞ以て傷寒に之れを得たることを知るや～肺の邪の心に入りて譫言妄語することを知るなり其の病・身熱し洒々と悪寒し甚だしきときは喘咳す・其の脈は浮大にして濇」などの様に、「風=肝」「傷暑(熱)=心」「飲食勞倦=脾」「傷寒=肺」「中湿(冷)=腎」とし、

(註……49難に久座湿地強力入水則傷腎とある・15難に腎北方水也～盛冬之時水凝如石と言う・明らかに腎性=水性=冬性の邪を指している、靈枢にも素問にも〈湿〉を脾に当ててい

る記述があるので、混乱を避ける為にも、また、肺邪の〈傷寒〉を寒えとし、腎邪の〈中湿〉を冷えと表現する、この様にして〈秋のヒエ〉は上から冒し・〈冬のヒエ〉は下から侵す点を区別する事にする)

十五難には「春脈弦は肝東方木なり」「夏脈鉤は心南方火なり」「秋脈毛は肺西方金なり」「冬脈石は腎北方水なり」とあり、三十三難には「肝青は木を象どる」「肺白は金を象どる」ともあり、五十六難では五臓の旺気する季節を、肝=春・心=夏・脾=長夏(季夏)・肺=秋・腎=冬と記述している。こうして

- ◇「木=東=風=肝」
- ◇「火=南=夏=暑(熱)=心」
- ◇「土=(中央)=季夏=飲食労倦(季夏の気である〈湿〉も含むと言えよう)=脾」
- ◇「金=西=寒=肺」
- ◇「水=北=冷(中湿と記述されている)=腎」

と言うシェーマが浮び上がって来る。

◎以上によって、「井穴」は春に配されている木性の穴で「肝」「風」に由来する症状に、「榮穴」は夏に配されている火性の穴で「心」「熱」「暑」に由来の病候に、「兪穴」は季夏に配されている土性の穴で「脾」「飲食労倦」「湿」の諸症状に、「経穴」は秋に配されている金性の穴で「肺」「寒」の諸症状に、「合穴」は冬に配されている水性の穴で「腎」「冷」の諸症状に用いる事が良い、それを「～を主る」と記述しているのが分かるのである。つまり六十八難に記述されている五兪穴の主治症は、例えば、単に「心下満」「体重節痛」などの記述されている症候のみを指しているのではない事が理解されるのである。

3. 気の所在を刺す

◎七十難には「～春夏ニハ浅ク刺シ秋冬ニハ深ク刺ストハ何ノ謂ゾヤ～春夏ハ陽気上ニ在リテ人氣モ亦上ニ在リ故ニ当ニ浅クコレヲ取ルベシ・秋冬ニハ陽気下ニ在リ人氣モ亦下ニ在リ故ニ当ニ深クコレヲ取ルベシ」「春夏各々一陰ヲ致シ秋冬各々一陽ヲ致ストハ何ノ謂ゾヤ～春夏ノ温ニハ必ず一陰ヲ致スハ初メ鍼ヲ下スニコレヲ沈メテ腎肝ノ部ニ至リテ氣ヲ得テコノ陰ヲ引持スルナリ、秋冬ノ寒ニハ必ず一陽ヲ致ストハ初メ鍼ヲ内レルニ浅クシテコレヲ浮ニシテ心肺ノ部ニ至リテ氣ヲ得テコノ陽ヲ推シ内ルナリ～」と述べている。これは七十二難の「～調気ノ方ハ必ず陰陽ニ在リト」と呼応している。

七十四難には「～春ニ井ヲ刺スハ邪肝ニ在リ・夏ニ榮ヲ刺スハ邪心ニ在リ・季夏ニ兪ヲ刺スハ邪脾ニ在リ・秋ニ経ヲ刺スハ邪肺ニ在リ・冬ニ合ヲ刺スハ邪腎ニ在リ～其ノ肝心肺腎ニシテ春夏秋冬ニ繋ルトハ何ノ謂ゾヤ五臓ノ一ツ病メバ輒ワチ五有ルナリ～ソノ病衆多ニシテ尽ゴトク言ウベカラザルナリ・四時ニ数有リテ春夏秋冬ニ並ビ繋ル者ナリ～」と記述している。これは正に「気ノ所在スル所ヲ刺セ」と言う指示に他ならないものと言えよう。

- ◎「四時ニ数有リテ～」の「数」は命数の「数」であり「サダメ」を意味する、故にこの部分は「天地ノ気」と「人氣」に意味が重なっていると見るのが適当であるから、「人も自然も皆春夏秋冬の廻りの法則的なものの下に在る者である」と言うほどの意味であるが、これはなかなか含蓄の深い所である。七十四難の「邪肺ニ在リ」などの様に記述されている部分には、前に整理したようなシェーマとの関係から「秋ノ邪」は「金＝寒」性のものであるから「経」穴を刺すのだという意味であると解するのである。
- ◎「気ノ所在」の問題では、前に触れた四十九難に記述されているものは重要な意味を持っている。そこに見られるのは、病因の帯びている五行性は臓の五行性を媒介にして病証的に表現されると言う認識である。従って、例えば「肺」が腎邪（＝冷え＝水性の邪）に冒されれば、病証は「喘咳寒熱」という症候「瀯」＝「毛」＝「浮瀯にして短」という脈状と「逆気シテ泄ス」「逆気シ少腹ハ急痛シ泄シテ下重ノ如ク足ノ脛寒エテ逆ス」（16）と言う症候「石」＝「沈濡して滑」（16）と言う脈状とが混合して現われると言う認識である。とすれば四診を総合して病像の全体を把握して、病理的な解析を加えて判断しなければならない事になる。つまり「病臓」と「病因」とを弁別する力量が要求される事になる。この様な問題が「気ノ所在ヲ刺ス」問題でもあると言えよう。
- ◎以上の検討から六十八難の五俞穴の主治症の記述は、五臓の病候を主治するものの様に見えるが、むしろ主として病因の五行性に対応したものと解すべきものの如くである。

4. その他の配穴原理

- ◎二十八難は邪気が正経から溢れて奇経（絡）に入ってそこに留まって正経の機能も関与出来無い状態の場合には「砭」で刺して「射」（出血させる）すべきであると記述する。
- ◎四十五難は「熱病内ニ在ル者ハ」八会穴から選穴する事を記述している。
- ◎六十六難では「五臓六腑ノ病」には「原穴」を取穴すべき事を述べている。
- ◎七十三難は井穴を瀉す替りに滎穴を瀉しても良い事を記述している。
- ◎六十九難と七十五難は「虚実」についての記述である。「気ノ所在」との関連について詳しい検討を要すると思われる。
- ◎この他に研究しなければならないと思われるのは「剛柔関係」論が三十三難・四十難・六十四難・六十七難等に見えるが、「是レ剛柔ノ事ナリ陰井ハ乙木陽井ハ庚金～」（64）と「陰病ハ陽ニ行キ陽病ハ陰ニ行ク故ニ募ハ陽ニ在リ愈ハ陰ニ在ラシム」（67）は取穴論としての意味が在るものと考えられるので詳細に検討する必要がある。